プロフィール

三重県津市に生まれ、京都に育った川喜田二郎氏は、植物採集をきっかけに自然探求への関心を深め、中学から大学を通して山岳部員としても活躍した。京都帝国大学では地理学を専攻するかたわら、今西錦司らの指導のもとにポナペ島や大シンアンリン山脈を学術探検し、多大な学際的刺激を受けた。大学卒業後の召集による戦争体験は、世界平和への貢献の必要を痛感させ、戦後の氏の指針となった。1953年第一次マナスル登山隊に科学班の一員として参加。その英文調査報告書『ネパールヒマラヤにおける民族地理学的諸観察』(1957年)は今なお第一級の研究資料として評価される。以後もネパールに関する研究調査活動を精力的に進める一方、国内では大学紛争を機に東京工業大学を辞職して「移動大学」を設立し、野外調査で自ら培った理念と方法論の実践につとめた。その後、筑波大学・中部大学で後進を育て、現在は川喜田研究所理事長として多彩な研究・実践活動を続けている。

川喜田氏は、独自の民族地理学を構築した。それは、主客一如の立場から「混沌をして語らしめよ」という徹底した現場からの発想に、方法論の核を据えている。同氏は、そこから野外科学の方法論を体系化しただけでなく、さらにそれを「ＫＪ法」という問題解決の独創的な方法論へと高めていった。今日、「ＫＪ法」を活用する企業や研究機関も多い。

また現場でのニーズの発掘に基づく簡易水道の建設をはじめ、日本とネパールとの交流にも尽力し、この面での功績も大きい。これは、実践的ヒューマニストとしての氏の一面を物語る。

主な著作

Ethno-Geographical Observations on the Nepal Himalaya, 京都, 1957

「ネパール・ヒマラヤの生態学」(『地理学評論』30-9) 1957

『ネパール王国探検記』1957　『鳥葬の国』1960　『野外科学の方法』1973

「中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造」(『季刊人類学』8-1) 京都, 1977

『ＫＪ法』1986　『素朴と文明』1987　『ヒマラヤ・チベット・日本』1988

『国際技術協力の哲学を求めて』(編著)名古屋, 1989

(出版地のないものは東京にて出版)